論　文　要　旨

学位論文題目　　「後日の再感謝」の談話分析研究―日中の母語場面と接触場面の比較から―

氏　　名　　市原　明日香

本論文では、「感謝」の言語行動の中でも、恩恵を受けたその場の感謝ではなく、以前に恩恵を受けた相手と後日に再会した場面で再び感謝が行われるものを「後日の再感謝」と名付け、研究対象とした。「後日の再感謝」は、「このあいだはありがとう」などの発話であり、日本語に特徴的であるとされてきた。友人同士の間での恩恵のあった後日の場面の会話に焦点を当て分析した。

本論文の目的は、日本語母語話者（JN）の母語場面、中国語母語話者（CN）の母語場面、中国人学習者と日本語母語話者の日本語接触場面を対象に、日本語と中国語の母語場面及び接触場面の会話における「後日の再感謝」の言語行動の有無と談話の特徴を比較し、それぞれの場面でどのような異同がみられるのかを明らかにすることである。本論文は日中比較、母語場面と接触場面の比較、学習者個人の会話の比較という 3 つの研究から構成される。

研究Ⅰでは、JN と CN の 25 組 50 人ずつ、合計 100 人を対象に、恩恵を受けた後日の場面で「後日の再感謝」の発話行為を行うかどうかを調査した。日本語では 86%の高い割合で「後日の再感謝」が行われることが明らかになり、先行研究を支持する結果となった。次に、恩恵の種類別にみると、先輩を紹介した「労力の恩恵」については有意差がみられたが、「物質の恩恵」については有意差はみられなかった。すなわち、JN は恩恵の種類の違いに関わらず「後日の再感謝」を行うとする先行研究や CN は「贈り物」や「借金」などであれば「後日の再感謝」の発話行為を行うという先行研究を支持する結果となった。CN でも、「労力」の恩恵に対しては 72%、「物質」の恩恵に対しては 52%と、50 人中の過半数を超える 31 人（62%）が「後日の再感謝」を行っていたことについては、中国語では友人同士の親しい関係では感謝の発話行為を行わないとする先行研究の指摘と異なることが明らかになった。

次に、JN と CN とでは「後日の再感謝」にどのような機能の特徴がみられるか、「談話上の機能」と「対人調整機能」の両面から探った。JN と CN の「後日の再感謝」の初出ターンおよび感謝ストラテジーの比較により分析した結果、JN ではほとんどが会話の開始から早い段階のターンで「会話のオープナー」（Coulmas 1981）もしくは「形式的な標識」（Hymes 1972）として使用される傾向にあった。CN でも同様に「会話のオープナー」の機能で使用されることもあるが、実質的な感謝の話題の一つとして主題化してやりとりされ、感謝の「通常の機能」（Hymes 1972）として使用される傾向にあった。JN は定型表現などによる負担の軽い感謝ストラテジーを CN に比べて多く用いるのに対し、CN は「関係継続の表明」ストラテジーや「お返しの言及」ストラテジーなどの負担の重い感謝ストラテジーを用いる傾向にあった。JN は敬体にスピーチレベルをシフトすること、CN では否定的なコメントも含めた報告を行う例があることなどが、それぞれの特徴として観察された。談話の中の出現位置や感謝ストラテジーの種類から、

JNの「後日の再感謝」が「会話のオープナー」の機能であり「コンテクスト化の慣習」(Gumperz 1982)であるのに対し、CNは必ずしも「コンテクスト化の慣習」としてやりとりされていないことが明らかになった。

研究Ⅱでは、日中双方の母語場面と接触場面を比較して母語の影響がみられるかどうかを明らかにすることを目的とし、CNの母語場面とCNの接触場面及びJNの母語場面とJNの接触場面の4つのデータ群を比較した。日中それぞれの母語場面と接触場面の「後日の再感謝」の出現率を比較したところ有意差がみられなかった。接触場面においては、日本語母語話者も中国語学習者も「後日の再感謝」の有無に関しては自らの語用論的慣習を必ずしも調整していないことが明らかになった。また、JNもCNも「後日の再感謝」の機能の面からみた限りでは、それぞれの母語の語用論的慣習を接触場面に転移している会話例が示される結果となった。しかし、CNが接触場面で使用する感謝ストラテジーの種類がJN母語場面のパターンと類似する等、調整している可能性も示唆された。また、接触場面のCNの中には、否定的なコメントも含めて報告を行うというCNの特徴を保持しつつもJN特有の敬体へのスピーチレベルシフトや「感謝行為遂行的」ストラテジーを併用することにより、JNの対人調整機能へと発話を調整している例が示された。

研究Ⅲでは、データ群の比較ではなく個々人のCNが接触場面の「後日の再感謝」の発話についてどのように転移あるいは調整しているのかを解明することを目的とした。同一話者のCN日本語学習者のL1中国語とL2日本語の「後日の再感謝」の出現パターンを比較したところ、両言語ともに発話した者は15人中8人と最も多くみられた。談話に現れた機能面からみるとL2日本語の特徴に合わせた調整行動が示唆された。フォローアップインタビューでは、日本語の「感謝」の語用論的知識から調整を行う意識や、L2日本語からL1中国語への「逆行転移」の経験が語られ、言語調整の意識が示された。

多様化する接触場面で生じる課題に対応するためには、「後日の再感謝」のような「その場面で言われると予測されること」を含む社会文化的な文脈に関わる語用論研究の蓄積が今後も必要となるだろう。